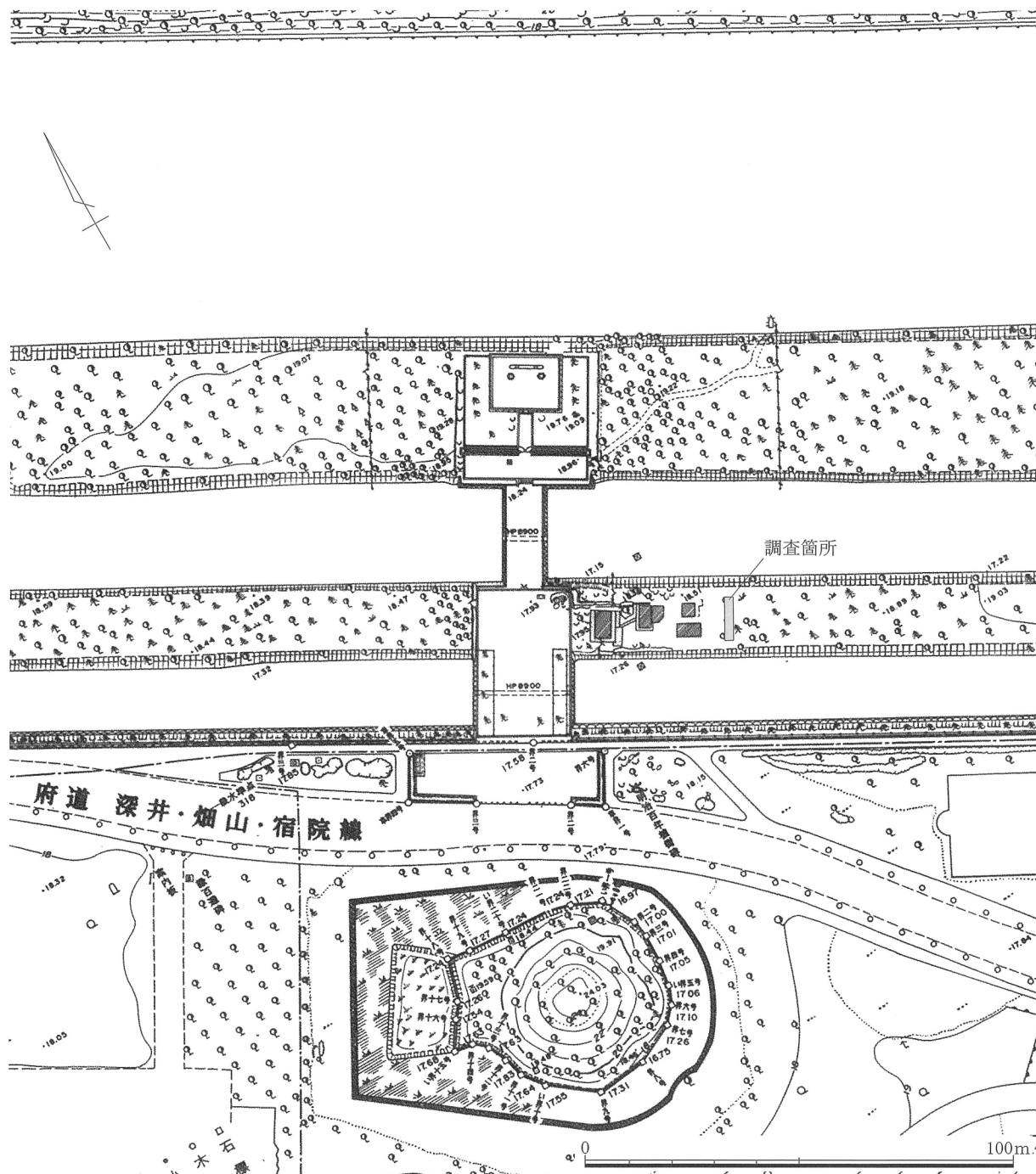


百舌鳥部事務所改築工事箇所の事前調査

はじめに

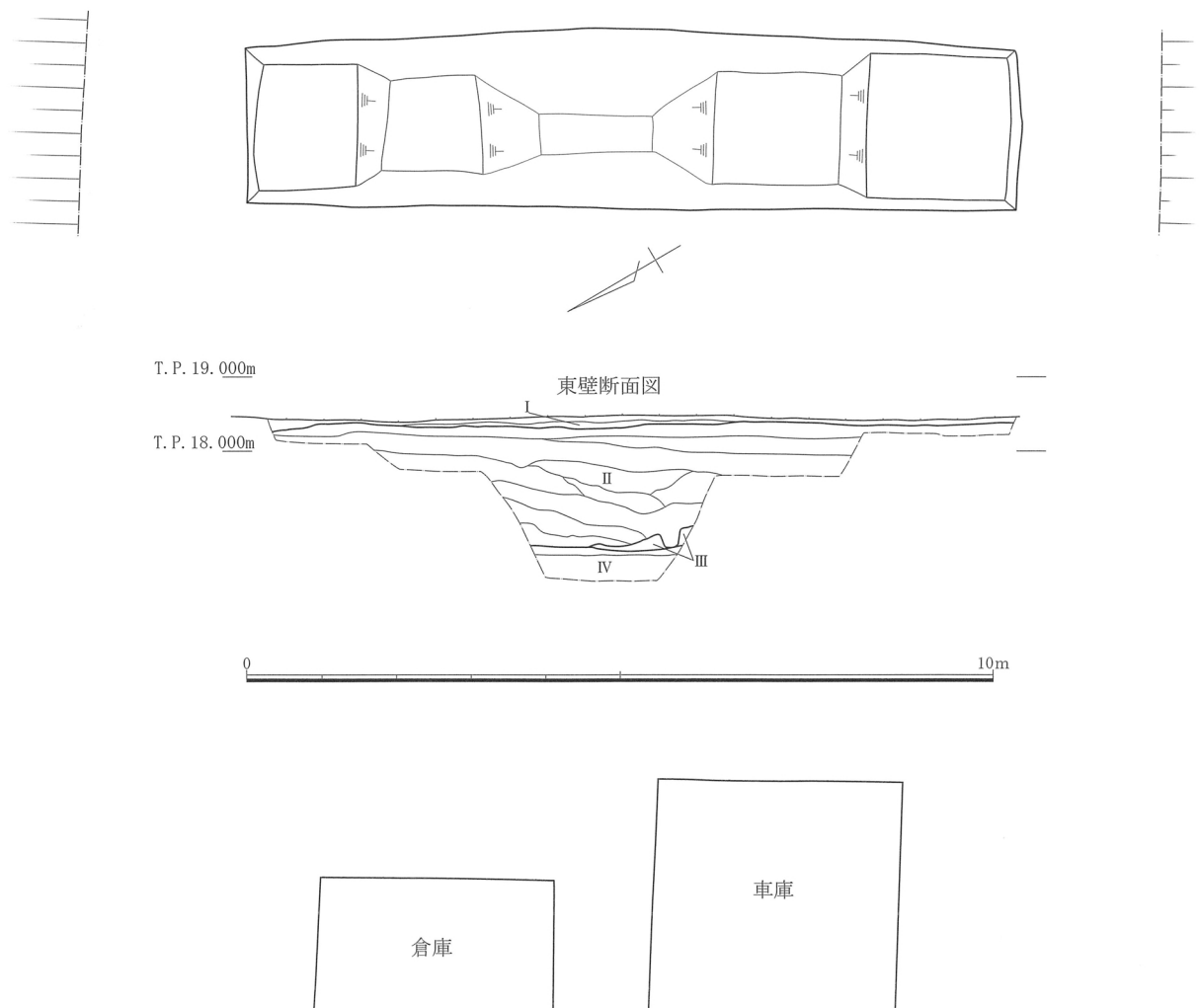
古市陵墓監区事務所百舌鳥部事務所は仁徳天皇百舌鳥耳原中陵の陵前に所在しており、第2濠と第3濠の間にある第2堤上に位置する。現在の見張所は昭和47年に築造されたものであり、約40年を経て老朽化したことと、管理用機材が増加し物置・駐車場などが狭隘となったために建て替えることが予定された。しかしながら現在の建物より平面積が広くなることと、建物自体の重量が増えることから基礎深度が深くなる



ことが予想され、現在の場所に建設することが可能か否か、さらには原初の遺構・遺物の有無を確認する必要があると考えられた。そのため建設予定地において事前調査を実施することを計画し、調査は平成23年12月13日から22日まで実施した。以下、この調査成果と出土遺物について報告する。

調査結果を記述する前に、昭和47年に実施した現在の部事務所改築工事に伴う調査報告を再確認しておくこととしたい⁽¹⁾。この調査は昭和47年7月10日から1週間にわたって実施されたものであり、事務所基礎部分($L = 5.3 \text{ m} \times W = 4.7 \text{ m}$ $D = 0.8 \text{ m}$)、浄化槽設置箇所($L = 2.5 \text{ m} \times W = 1.7 \text{ m}$ $D = 1.5 \text{ m}$)、吸込槽設置箇所($L = 1.6 \text{ m} \times W = 1.6 \text{ m}$ $D = 1.6 \text{ m}$)を掘削したものである。この時の報告によれば、いずれの掘削箇所でも地山に到達せず、土層は黄褐色の粘質土もしくはブロック状の粘土と砂礫が入り混じった土層であると記述してある。さらに出土遺物としては、摩耗した埴輪片が数点と室町、江戸時代に下ると考えられる瓦、陶磁器片が報告されている。この結果から、この時の所見では現在の第2堤は、明治時代のある時期に浚渫土を盛り上げたものではなかろうかという結論を記している。

この調査結果からすると、当該地においては原初の遺構・遺物が存在する可能性は低いと考えられるものの、いずれの掘削箇所においても地山に到達しておらず、本来の堤の有無についての情報は不足している。また、今回の基礎深度が深くなることが予想されたことから、今回の事前調査では地山の位置を確認することを目的とし、地山が確認できるところまで重機を使用して掘削することとしたものである。



第28図 百舌鳥部事務所改築工事調査箇所 平面図・断面図 (1/100)

掘削箇所の状況

掘削した位置は第27図に示したように、現在の部事務所の裏手にあたる場所において、第2堤を横断するように幅2 m、長さ10 mにわたって設定した。掘削深度が深くなることが予想されたことと、第2、第3濠から浸水する心配があったため、両端から階段状に掘削し、結果的には中央部分の約1.5 mほどの範囲を地山まで掘削することとなった(第28図参照)。結果的には現地地表下1.8 mほどのところで地山を検出し、最終的には同2.3 mほどの深度を掘削した。

次に掘削箇所の土層であるが、地表から30 cmほどは腐植土の表土及び近年の堆積土であり、その下に昭和47年の時にも観察された、黄褐色の粘質土がブロック状に積まれた土層(Ⅱ層)が観察された。このⅡ層が1.4 mほどの厚さに堆積しており、堆積状況から一気に積まれている状況が観察される。調査区の中央部分で土層を観察すると北から南に向けて、すなわち第2濠から第3濠にかけて若干の傾斜をもって堆積している状況が窺える。このⅡ層の土質を観察すると灰色を帯びた土層は、濠内の堆積土を浚渫した様相を呈し、黄色を帯びた土層は地山起源の土質を呈する。この土層図から判断すると、Ⅱ層が現在の第2堤の大半を構成しているものといえる。

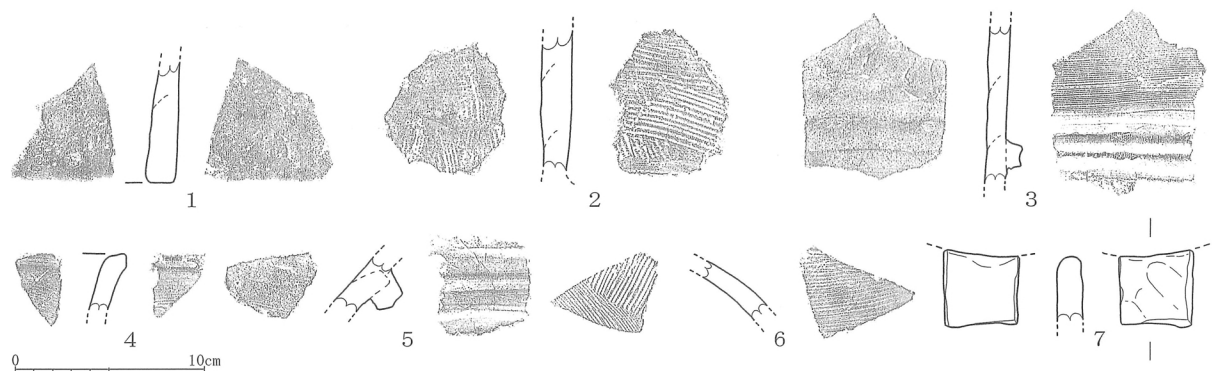
このⅡ層の下が直接地山層(Ⅳ層)となるが、ほんのわずかであるがⅢ層とした灰白色の粘質土が確認された。この土層はⅡ層の粘質土とは異なり非常に均質な土層であって、南から北へ傾斜を示している。この土層の性格については不明といわざるを得ないが、Ⅱ層の堆積時期とは異なる可能性が高いと考える。しかしⅡ層からは摩耗した埴輪片が数点出土したのみであり、Ⅲ層からは出土品はなかった。それゆえⅡ層とⅢ層の時間差を明確にすることは困難である。Ⅳ層の地山は灰白色を呈するシルト層であり、非常に堅くしまった土層である。なお、調査時の第2濠の水位は17.2 mであり、第3濠は17.1 mであった。確認された地山の上面は16.7 mであり、いずれの濠も地山より高いところに水面があることになる。(徳田誠志)

出土遺物

出土遺物の総数は49点であり、その大半が埴輪片である。以下では出土した埴輪片を紹介するが、基本的にこれまでに知られている当陵出土品⁽²⁾と大きく異なるものはない。

1～4は円筒埴輪の破片である。1は底部を含む破片で、外面は摩滅しており調整は不明である。内面には指頭痕がみられる。2・3は胴部の破片で、2は外面調整としてタテハケの後に左上方向のハケが荒くほどこされている。内面調整のハケもほどこしかたが荒い点の特徴である。3は突帯上に布目の痕跡がみられる。突帯成形・整形時に布を使用していたのか、あるいは他の作業時に不意に残してしまった痕跡であるのかは不明である。外面調整のヨコハケは現状では静止痕が不明である。4は口縁部を含む破片である。

5・6は朝顔形埴輪の破片である。5は1次口縁部から2次口縁部にかけての破片で、6は肩部の破片である。7は器種不明であるが、形象埴輪であると思われる。(加藤一郎)



第29図 百舌鳥部事務所改築工事調査箇所 出土品実測図 埴輪(1/4)

まとめ

以上、今回の事前調査についてトレンチ掘削状況と出土遺物を報告した。最後にこの調査結果についてまとめおきたい。まず、今回の調査結果は昭和 47 年に実施した状況と一致し、特に今回の調査でⅡ層とした土層によって現在の堤体が築かれていることを追認することとなった。すなわち原初の遺構、例えば埴輪列や葺石はまったく存在せず、少なくとも現在見られる第 2 堤が形成された時期は、江戸時代の絵図などから判断すると明治期であることを裏付けるものと考えられる。しかしながら、Ⅱ層から明治期を確定できる遺物は出土していない。また、地山の上に直接Ⅱ層が堆積しており旧表土が認められないことと、Ⅲ層とした灰白色の盛土が認められることから、単純にⅡ層を積み上げたものではなく、何らかの整地を行った上で堤体を築いたものと思われる。

なお、事務所の改築にあたっては、分散していた建物を集約し、基本的には現在の事務所と同じ位置に建設することとした。但し、ここの地盤が盛土のため十分な強度が得られないことから、土壌の柱状改良を行った上で改築工事を実施することとなった。工事にあたっては改めて立会調査を実施するが、現在の地表面から 50 cm 程度の掘削にとどまる予定であり、昭和 47 年度と今回の調査結果から判断して原初の遺構・遺物に影響を与える可能性は低いものとする。（徳田・加藤）

註

（1） 戸原純一「仁徳天皇陵前百舌鳥部事務所改築地区の調査」『書陵部紀要』第 25 号 宮内庁書陵部 昭和 49 年 3 月。後、『書陵部紀要所収 陵墓関係論文集』1980 年に採録。

（2） 宮内庁書陵部『出土品展示目録 埴輪Ⅱ』1994 年。

加藤一郎「大山古墳の円筒埴輪—竈窯焼成導入以後における百舌鳥古墳群の円筒埴輪—」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金〔基盤研究（A）〕研究成果報告書、奈良大学文学部文化財学科、2008 年。



1 百舌鳥部事務所改築工事事前調査箇所 全景（北西から）



2 百舌鳥部事務所改築工事事前調査箇所 土層断面（西から）